

研究会記録

第二回チッソ労働運動史研究会記録

研究会参加者の紹介

花田 これから第2回目の研究会を始めていきたいと思います。今回は、熊本学園大学商学部で会計がご専門の酒巻先生、佐賀大学経済学部で労働経済学を専門とされています富田先生にきていただいています。お2人がこの研究会に参加されるのは初めてですので、まずは自己紹介からお願いします。

富田 佐賀大学の富田義典といいます。研究内容は、ごく最近の日本の自動車産業の労使関係を調べています。ホンダと日産の労働組合、それから会社側について現状を調べていて、ほぼそれが今年で終わって活字になりかけています。大学では労働経済という分野を教えています。まあ、ざっくばらんないろんな話が聞ければ本当にいいなと思っています。よろしくお願いします。

酒巻 学園大学の酒巻と申します。私の専門が会計学ということで、私に出来ることは何かなということがひとつあります。会計、簿記会計をやってますので、当然財務諸表から何か見ていくということです。水俣病あるいはチッソに関わりを持ったのは花田さんとずいぶん前、5～6年になりますかね、国の科学研究費が出たので、チッソの財務諸表を20年くらい溯ってみましたけど、それを使って何か研究をするというと、チッソの歴史を知らないとい何もできないということです。これまでにやったのはチッソの財務と、いわゆる補償金の問題ですね、特に、県債問題をチッソの財務にからんで、考えていこうと思っています。チッソのいわゆる安賃闘争というか、いわゆる労使間の交渉ということと花田さんのどちらかということと研究テーマなんですが、私はそれぞれの言い分を財務諸表の数字の上で研究してみようかなあというふうに思ってます。そのためにはここにある資料がおそらく非常に貴重なデータになるのではないかと思います、あれだけの膨大な資料を、どういうふうにするかというのがなかなか難しいですね。何もないところで資料を見つけ出すというのはおそらく不可能です。まあ、そういう意味で、皆さんにいろんなアドバイスを受けながら、なにか実りあるものを出せばいいなと思います。よろしくお願いします。

花田 では新日窒労組OBの方々、自己紹介をお願いします。どうぞ先輩から。(笑)

小形 小形喜代太です。小形というのは小さい形、人形の形です。キは喜ぶ、君が代の代、太郎の太。非常に古典的な名前です。

私はチッソに工作課というのがございましたが、その工務関係に入りました。そこで退職までやりました。組合としては写真部の仕事をずっとやりました。後で見

てもらえばお分かりのように、ここの組合の場合は、写真や資料がある程度潤沢に残ってたもんですから、それで写真集¹⁾をつくってまとめることができました。昭和21年に組合が出来ましたが、写真集の中にありますように23年からの写真しか残っていない。23年のメーデーからで、それからが始まりで、あとそのいろいろ身分制の問題とかございますから、あとで検討していかれたほうがいいのかと思います。

私の生まれは昭和3年1月2日で、私が一番若いんです、ここでは。入社は昭和18年です。18年の4月1日。そして途中で、あの頃は特攻隊なんかあったもんですから、一時退職、ちょっと切れた状態になりましたけれども、継続してくれましたので継続して、昭和58年の1月に退職になりました。その間、工務の仕事なもんですから、会社は、千葉のコンビナートの建設²⁾とかそういうところに私をいじめるつもりで一生懸命、何回か出張に出したりしたんですけど、幸いそれがかえって勉強になりましたね、業者さんのいろいろの問題なんかにも対応したもんですから、非常に勉強になったと思います。その点会社にはお世話になって感謝しております。水俣の工場、チッソのそばにおりますので、どうぞ暇なときがありましたら立ち寄ってください。以上でございます。

大戸迫 私は、大戸迫輝夫と申します。小形さんよりもちょっと後輩で昭和4年12月30日生まれで、やがて今年末で喜寿を迎えますが、チッソとの関わりあいというのは昭和21年に入社いたしました。そのころ17歳くらいでしたかね。それから昭和30年に青年部長という形で組合に担ぎ出されて、そのころはまだいわゆるその企業内組合でした。ご存知でしょうかね、太田薫さんが合化労連つくったころ、いわば企業内組合で、まあ適当にやっと思ったんでしょうが、それが37年のいわゆる安賃闘争に入って、それからもうずーっと組合の専従、除外となったら職場に帰って、といっても職場に帰れば職場の職長とか、地域に帰れば地区委員長とか、そんなのをして、ほとんどもう定年まで勤めさせてもらいました。あのころは安賃定年なんて言いよったんですけど、終わってみたら60歳まで会社におったような形です。そうですね、OBという形ですか、定年した後もまだ残ったという形で68歳まで工場において、計算してみたら50年くらいそこにおったんですよ。

生まれも育ちも水俣で、もう純粹水俣の人間でございます。名前は大戸迫、大きな戸の迫と書いて、大戸迫輝夫と申します。生まれも育ちも何回も言いますが完全なる純正水俣人です。

松田 私は松田哲成と申します。昭和4年の生まれですので隣の大戸迫くんと同じで今年の5月に昔流に言えば喜寿を迎えました。私は昭和23年3月21日入社、それから定年の55歳までチッソ、チッソの工務部門を切り離すということで、最後のほうはチッソエンジ

1) 新日本窒素労働組合写真集編集委員会『創った そして闘いぬいた：新日本窒素労働組合59年のあゆみ』2006年1月。

2) 1962年6月、チッソ石油化学株式会社五井製造所設立。千葉県コンビナート誘致計画を受けて、水俣工場の主要製品を五井工場に移転させる計画であった。

ニアリングという会社名³⁾になりましたが、私は土建課の建築の設計に入社してから辞めるまで一応籍がありました。そして、結局どこの仕事でも自分たちで食っていきなっせ（別会社で独立採算の意）ということで会社が別にはなりませんでしたけど、待遇その他についてはチッソと同じということで定年を迎えております。考えてみたんですけど、昭和4年生まれまでが、定年が55歳ということでございます。組合には、組合の専従ば9年位してきて、会社の仕事は3分の2、組合の仕事は3分の1ということでしておりました。以上です。

山平 その次からちょっと若くなります。一番最後までというか、一番最後の解散大会まで残りました。私は、ちょうどストライキの時、安賃闘争の1962年の4月に入社しました。60歳でやめました。2004年の3月末に解散大会をしましたが、あくる年の3月には全員が退職して完全に組合がなくなるという状況だったもんですから、(定年直前の)6名が残ってる間に一応解散大会をしたうちのひとりです。

山平勝利といいます。勝利と書いて「かつとし」でなくて「かつのり」といいます。まあだいたい戦時中というか敗戦前の生まれだから、その頃の戦争に勝つようにということで名前をつけらしたと思いますけどね。

私も小形さん同様、会社に大変感謝しております。会社のためには、ならなかったかもしれないですけどね。最後はですね、私たちもいろんな意味で、松田さんとか、小形さんたちと同じ職、仕事でなくて、最後は私も研究関係を長くしましたが、最後は資料整理で一応終わりました。いろいろ研究は30年くらいしましたかね。以上です。

高橋 私は高橋幸一といいます。入社は昭和32年です。今はこの資料センターの整理に来ています。私は組合の役職はしたことはありません。ただのヒラです(笑)。よろしくお願いします。

職場はもういろいろです。40年近く三交代しとるですけどね、塩化ニポリットも作ったし、塩化ビニール、酢酸とかストロビン酸の原料とか、磁性体を作ったりとかいろいろやってきました。どうぞよろしくお願いします。

山下 山下善寛(よしひろ)と申します。でも本名で呼んでくれる人はおりません。山下ぜんかんと言われてます。私は昭和15年9月生まれです。チッソに入社したのは、昭和31年、1956年ですけども、退職したのが2000年です。この間、研究所なんかにいたんですが、途中、水俣病の実験等にも従事しました。組合のほうは昭和38年の安賃闘争後、青年婦人部という形で活動しましたが、実際、執行委員になったのは昭和45年からですね。昭和53年から12年間、岡本達明さんの後を委員長させてもらって、2000年に退職しました。現在、組合の資料整理をさせてもらってます。

徳永 徳永常喜と申します。生年月日は昭和8年12月24日です。水俣生まれでございまして、入社は昭和23年、哲ちゃん(松田哲成)と同じかな。3月21日、私、工場に14歳で入り

3) チッソエンジニアリング株式会社、1965年2月設立。

まして、2年間は工務部のボーイをしまして、それから後は製造部にいました。それからまた工務にきて、それから、安賃闘争に入りますけど、その前、昭和34年に青年婦人部長をやらしてもらって、そのあと闘争後4～5回執行委員をやらしてもらってます。それから昭和44年、五井の方、五井の石油化学に転勤しまして、平成14年に帰ってきました。

糸田 糸田憲夫といいます。縦に書けば普通に読んでいただけるんですけど、そそっかしい人は細田なんて言います。1940年生まれです。職歴を簡単に申し上げますと、昭和35年、1960年チッソに入りまして、2年後に安賃闘争を経験しました。その中でどういうわけか、争議終了後、余剰人員、つまり「能力劣悪者」ということで子会社に配転⁴⁾になりました。その間ずーっとチッソに帰せ、帰せという運動をする中で、昭和56年でしたか、やっとチッソに帰ることができました。その辺の記録もありますので、後ほどみていただければと思います。仕事でいえば、ほとんどが雑作業といいますか、土方だったり機械工やったり、中途半端なんですけど、いろんなことを覚えさせてもらいました。チッソに帰ってからは、シリコン関係の研究、研究と言いましても上司の作業指示に従って作業するだけでしたけども、シリコン関係で定年を迎えました。組合歴でいえば、先ほどの山下善寛さんの後、委員長をやりまして、2000年の4月に定年になりまして、今日に至っております。よろしくお願ひします。

戦後の食料難と現物支給

山平 昔は食糧難時代でしょ、組合が出来たころは、昭和21年といえば。残業すれば米が支給されよったそうですよ。残業米ちゅうて。出張すれば、出張米。それば初期の代議員会の議事録に書いてあります。私たちは、後でそれで初めて知るとですよ、残業代とか出張代とか。そして残業代はかなりして貯めて。だいたい提案するんですもん、家に持って帰るかどうするかちゅうて。提案して。帰って食べる人が多くて、従来通りしますというかっこうになっとつとです。

酒巻 じゃあ、まとめて組合に一括して渡しちゃうわけですか。

小形 職場で。

山下 後からは組合にも送ってきよったですね。

小形 俵ごと送ってきたりなんかしよったりした。長いでしょ、出張期間が、長いとその分だけこう、ぽーんと送ってくる。昭和28年ごろのことです。

酒巻 給料は現物支給ですか。

小形 それと、その出張に対する食料がないもんですから。魚までくるんですよ。魚も腐っ

4) 会社は、1964年1月「過剰人員整理」として、南九開発（後にチッソ開発）へ300名に及ぶ労働者（多くが第一組合員）の強制配転を行った。チッソ本体との賃金、昇給、退職金などの労働条件格差は大きく、組合は以後10年にわたり、ストや訴訟などの手段で差別是正の闘いに取り組んだ。

たようなのが送ってくる。魚までくるんですよ。ちょうど今、五家荘があんなになってます（ダム建設計画による開発が進んでいる）でしょ。私は白川の発電所⁵⁾のとき最初に入ったんですが、そのときなんか、そのときそんなふうにも米俵で送ってくるんですよ。ジープでも送ってくる。でついでに魚も持ってくる、腐って、もう、今なら食べないですよ。そういうやつが現物支給として。

酒巻 要求してるわけじゃないんですね。

山下 いや、要求するんじゃないんですか。

酒巻 単純に考えてトップがやるとは思えない。

大戸迫 要求として出しとったじゃろ。

山平 代議員会の議事録の中では要求として出てくる。そのころ、最初のころの組合じゃなかったですか、みてみれば。組合じゃなかとおかしかですもん。組織ばつくってから分かんかったとでしょ。それで、ちょいちょい不信任くろたりいろいろしとるですばい。組合長が勝手に代議員会で決定したとば違うことばしたとか、不信任になったりしとるとですたい。

大戸迫 なるほど。

小形 だいたい昭和21年の組合長が、交渉するとかないんです。

酒巻 交渉はしないの。

山平 交渉はせんとですたい。

大戸迫 ああ、そうじゃろな。

山平 その頃、安全委員会ば作ろうかという話の出とる。あらあたいしたもんじゃねと思うのですが。

花田 あのですね、労働基準法だと賃金の現物支給は違法です。賃金は現金で支給することになっています。多分その昭和21年とかは食糧難時代の緊急避難的な措置なんでしょうけど。

大戸迫 今の法律は、いつ出来たんでしょうか。

花田 厳密にいうと違法になるけど、お金よりは米の方がありがたかったってことでしょうか。

全体 そう。そうでしょう。それはそうでしょう。

山下 戦後、もののない時代に朝鮮から引き揚げて来た人たちが自分たちで訴えて、だから会社で畑もって自分たちで作って。

徳永 地の人たちはよかったけど、やっぱ引き揚げてきた人たちは、物がなからですね。

小形 塩田の後に唐芋つくったとか、そういうことはあります。

花田 それは仕事ですか？

山下 仕事です。畑は会社で畑買って、仕事でして。

5) チッソは、水力発電所を13ヶ所所有しており、とくに川辺川上流の五木村や相良村にはは数ヶ所の発電所を置いていた。

大戸迫 そのころほんと、朝鮮の興南（工場）がなくなって大量に引き揚げてきたもんだから、その受け入れ母体が水俣だったもんだから、いろんなことがおこったかもしれないなあ。

徳永 水俣、地のもんだけだったらやってないというしかない。

大戸迫 まとまってじゃなくて、バラバラ帰ってきたとでしょ。38度線を歩いたとか、やれ船を借りてきたとか、まとまってる引き揚げではなかったとでしょ、おそらく。

初期の組合

山平 組合規約を見れば、組合長を2名にすると、1人は社員、1人は工員となってる。規約に。それをなくそうという提案をするとですたい。目覚めてはおるわけですから、ほんなこですよ、社員が1人、工員が1人と。2人のうちの2人が組合長になっとった。

花田 組合は一つですか。

山平 組合は一つですたい。そんな時はまだ。

山下 25年くらいからレッドパージで分裂しとっとですよ。

大戸迫 レッドパージの頃から、組織としての形をなしたんじゃなかならうか、組織としてね。

山平 運営自身ができている、今はもう、組合長は選挙するでしょ。（当時は）執行委員の中から選んで互選の形だったでしょ。

小形 野田正雄さんは私の職場だった。彼が初代の組合長だったけど、組合の事務所なんかなし。

大戸迫 そうでしょうねえ。組合がどういうもんか分からん時代やったけ。

山平 県労連のごたつとはあったとか。

小形 すぐ作ったです。

山平 そうそうそう、硫労連のようなのには最初から入っていた。後で産業別の合化労連になった。記録を見ていると、闘争資金を集めようというのが23～24年ごろ。代議員会と組合大会の間に、総会ばして、370～380人ばかり集まってな、そこに総会て。そこに提案している。1年に4～5回くらいそぎゃんとかあつたい。集めて。代議員会もけっこう集まるとつとですたい。1年に50回くらいあった。

富田 代議員会？。

山平 はい。そんな頃ですよ。1年に50回くらい。それで結構集まって、討議ばしよつとつとでっしょな。分からんなりにもですな。

小形 昭和25年にはまだ組合事務所がなかったですから、それで会社の社員クラブみたいな不知火クラブでやってました。写真集に写真が一枚入ってますけど。

大戸迫 小形さん、レッドパージの時には組合事務所はあったとでしょ。

小形 レッドパージの時には今のCE（チッソエンジニアリングの略。現、チッソ東門の右側を指す）のこっちの方に。

大戸迫 そうたい、昔の組合事務所があった。あの頃から、組合が形になったじゃなかるか。

職場の書記と労働組合

山平 その頃は、ほとんど会社の書記を通じて連絡しとったですもん。代議員会とか。集まらんとときは書記に徹底せよとか書いてありますもん。

花田 会社の？

山平 会社の書記です、書記。会社の職場に書記ちゅうもんがおったですから、ずっと。

徳永 1～2名かな。

山平 会社に申し入れて総会なんかほとんど昼休みです。代議員会は、だいたい3時ごろからすると5時ごろまで。1回、成立せんで5時ごろまで待ったことがあって、そのときに書いてあったとですよ。最初から来とったもんはおったて。ちゃんと書記は、ぴしゃっと時間は守ってくれて連絡はしとったらしかですもんね。

花田 組合の書記じゃないわけね。

山平 もちろん組合の書記じゃなかない。職場の書記ですたい。

富田 人事課みたいなものですか？

大戸迫 いや、そうじゃなくて、各職場におったとですよ。組合員の資格一応持っとるとです。職場の事務屋さんのことです。だから決して偉くないから、組合の資格は有資格者ですわね、職制じゃなかくです。

山平 チッソはずっと書記と呼んでいたです。闘争中までそう言っていたいな。闘争後はそうはいわんかったけど。1962年のですね、安賃闘争。私たちが入った頃まではやっぱ書記といいよったですよ。

大戸迫 職場があれば係長がおって、まあ次席がおって、事務屋さんがおってそれを書記と呼んでいた。

山下 それらの係に事務所があって、その事務員を書記ち言いよったとです。

山平 給料は、現金で昔は印鑑押してまとめて書記に渡しよったとです、私たちが入った頃は。それを書記ち言いよったな。

大戸迫 全職場に事務所があって、書記がおったわけですよ。

山平 字もきれいかったですよ、ある程度はな、書記は。

酒巻 一つの職場はどれくらいですか、人数は？

山下 そら、それぞれです。

大戸迫 それぞれ。だから大きな職場とか。

山下 何百人という職場とか。

小形 私の職場は200人。一番多いときで200人くらい。

酒巻 そこに必ず職場というか事務員がいるわけですね。

大戸迫 ちゃんと事務所があるんですよ。

山平 闘争のころ1963年、カーバイト職場には、やっぱ300何人、人間がおったけん。カーバイト職場ちゅうて、昔は石油化学じゃなかった、電気化学ですから、カーバイト作っていた。

大戸迫 だから、しばらくの間は、係長がもう王様たいな。しばらくは、採用権もいわばクビにする力も、採用する力も係長が持とった。だから生殺与奪の権も係長どもが握とったわけ。だから各職場に事務所を構えて、それはその戦時中からの流れがそのままきとととでしょね。

山平 1回ですね、議事録を見てたら、課長を会社を辞めさせるちゅうわけです。定年があるところは50歳でしょ。後進に道を譲れということ、49歳で辞めさせるちゅうわけです。それで組合が反対しとととですね。自分たちが脅かさるって。

富田 それはいつごろの話ですか？

山平 昭和23年ごろの話です。

組合員の範囲

山下 かなり後まで課長あたりも希望すれば組合に入れよった。

山平 課長ば組合員にするちゅうごた、そういう提案もしてですね。

小形 あの、下飯坂正三⁶⁾か何かは課長ですかね、課長級ですかね。窓際におったけん、下飯坂を、ひっぱってきて組合長にしたっです。

山下 だから、あとで労働組合かなんかで、会社と組合で、非組合員をどこまでするかちゅう話ばして。

全体 そうそうそう。

山平 非組合員は、各職場の課長、課次長ち書いてある。勤労何等かとか、タイピストとか、英文の、要するに各職場にあったとが英文と和文のタイピストの各1人ずつとか、そして発電所の所長とか、電話交換手、専用の自動車運転手は非組合員だった。要するに、公用車の運転手は低く見られると困るわけでしょ、会社としては。昭和24年のときの議事録に書いてあります。

大戸迫 やっぱ、レッドパージ時の前までやな。

小形 組合の解散記念の写真集⁷⁾の年表にもその件がちょっと抜けとる。ちょうどその最初のところ。

山平 昭和21年から25年までが抜けとる。

小形 抜けてますでしょ。ちょうど今その間の話。

山下 その資料まで調べとらんかったとですよ。

山平 その時は、機関紙で全部、年表作りましたからね。大会の議事録なんか、ほとんどま

6) 下飯坂正三、1946年12月から1947年12月まで組合長。

7) 新日本窒素労働組合『創ったそして闘いぬいた』2006年1月。

だ見とらんもんですから。

中央経協と労使交渉

富田 あと、中央経協なんですけど、それが労使協議の昔からあるメインの制度なんですか。

中央経協ってやつが。

山下 私たちの時は、そう言いよったけど。松田さんが昔のことは知っている。

山平 水俣工場経協（経営協議会）と中央経協と。

松田 中央経協の時には結局、東京本社、大阪で、結局チッソのオールがやってる、そして会社が。

富田 工場経協は、工場単位とか事業所単位とか。

松田 大阪事務所とか東京事務所とか。

山平 最初の頃の経協は、本社は大阪じゃなかったですか。

大戸迫 株式上場は大阪が本社。

山下 中央経協も水俣工場でしたときもあつとです。場所ば移して。

山平 確か、最初は経協でも団交でもそこでするかとか（東京とか水俣）、重役ば決むつときも、組合の意見ば聞いたと書いてあります、重役のどうのこうのと、ちゃんと。

花田 写真集を作ってる時は、そんな資料が眠ってるて知りませんでしたね。

山下 そうです。

山平 知りもせんし、見る余裕もなかった。

富田 工場経協の方もありますか。中央経協の方もあつて。

山下 あります。

山平 中央経協報告書なんかありますから。さっき言ったように、総会で経協報告しとるですもん。

山下 会社あたりも勤労時報で流したりもしてるからですね。後からはしなくなったが。

松田 チッソの場合は、一会社一工場というか、結局、会社はチッソ株式会社だけだったと、工場は水俣だけだったもんですから、結局、東京事務所と大阪本社と。それぞれ、東京は東京で労働組合があつたし、大阪は大阪と、本社と。それぞれみんな組合があつたもんですから、たとえば、みんなストライキに入るとかいった時にはですね、東京も大阪も水俣に来て、そして、皆がこうして3つの組合が足並みそろってやるようなアピールする形で結局、総決起大会なんかしよつたとですよ。

酒巻 そうでしょうね。

松田 だから、切羽詰った団交で、ストライキするか、せんかだから、東京も大阪も心配して水俣に出てくるちゅうことです。普通なら、団体交渉といえば、本社に行って団体交渉する、あるいは東京に行つてすると。

山下 ジュラルミンのかばん。それで持っていきよつたたい。

小形 私が持っています（笑）。トランク。資料を持って行って。大きなスーツケース。トランクにいっぱい入れて団交に行きよったです。

酒巻 カネじゃないですか（笑）。

小形 いやいや、カネじゃないですよ。それ、私が今持ってる。

酒巻 それ今ありますか。

山下 組合にもありますからね。

組合結成時期の問題

山下 花田先生が作った資料では、新日窒労働組合は1950年に結成されたとなってるですよ。

全体 21年ですよ。昭和21年です。

花田 21年は前の従業員組合でしょ。

全体 いやいや。

花田 生まれ変わったのは、再建大会みたいなのを25年にしてないですか。

山下 そうです。あれは革新労働組合。

花田 今のというか、今の組合をさかのぼるなら昭和25年までかなって、僕はどっか頭の中で思ってたんです。

全体 いや、だから21年から、21年からですよ。21年⁸⁾。

小形 25年には結局レッドパーージが出ましたでしょ。そのときに一晩のうちにくろっと変わって、変えてしまって今の組合の前身があるわけです。そして、いわば第二組合ですね。第一組合というのは、レッドパーージで共産党の黨員なんかが残って、150人くらい残った。そのそれを25年に変えたのが、そのことだろうと思います。

糸田 そのころ1回分裂してるんですよ。革新労働組合⁹⁾ というものができた。

大戸迫 そうか、それが25年だな。

山平 そうそう。しかも、吸収したでしょ。最後まで100何十人残ったひとが全部きたわけですよ。

大戸迫 組織がレッドパーージ後に再編されたのが、昭和25年だと思う。ああ、それが今ずっと残るとるとたいな。

小形 その前のやつも資料としては残ってる。

花田 一応、組合の正史としては、昭和21年にできたということですね。

全体 そうそうそうそう、そうです、そら21年。21年。そら先生、21年にせんと。

山下 日本全国に労働組合が出来た時に、いち早くできたわけです。

山平 写真集の歴史もびしゃっとしとかんと。

山下 さっき言うたように、組合らしいことしよったとです。

8) 1946年1月26日、日本窒素肥料水俣工場労働組合結成（3241名）。

9) 1950年12月7日、新日窒水俣工場革新労働組合結成。翌年2月26日、工場労組を吸収合併。

小形 で、今、我々がいう第二組合が第三組合です（笑）。

大戸迫 そうして分ければ、ぴしゃっとはっきりするな。

小形 いや、実質的にはそうだから。

山下 そういうことですね。

全体 そういうことです。

大戸迫 小形さんの言う第一組合は、小泉陽春¹⁰⁾のように東大法学部卒の錚々たるメンバーだった。筋金入りの共産党員だった。いわゆるGHQの指示でやられた、そういったメンバーですから、そういった社会情勢をみて、どうもこうもならん、どこの職場もそうでしょうが、超法規的レッドパージによって組合がもう壊れた。その後に来たのが、昭和25年のこれだと思うんですよ。組合員同士が揉めて第二組合を作ったのとは違う。アメリカの手による共産党員の職場追放から始まっているわけですよ。

花田 この労働組合自身が、昭和20年代の終わりの方から身分制撤廃闘争の中で組合らしくなっていくこと、労使関係制度がきちんと形成されていくというようなイメージです。それで、日本全体は高度経済成長に入った1962年に安定賃金闘争、日本の大争議が大体1950年代の初めですから、ちょうど10年遅れて、もう三池争議も終わった、新日鉄八幡の争議も終わった後に九州の地方都市で争議があった。これが一体、日本の労働運動の中でどういうふう位置づけるのかなというのが難しいところで、労働運動史の研究者はだいたい無視してるんです。九州の一地方都市の争議だから労働運動史を見てもほとんど出てこない。もちろん、合化労連の歴史とか総評史とか見れば年表の中にありますけど。

チツソはそれでも戦後、戦前からそうですが、化学産業におけるリーディングカンパニーのひとつですから、国策的にも重要な位置にあったし、技術的にも高いものを持っていた。であるがゆえに水俣病を起こし、この第一組合が水俣病の問題で企業犯罪を告発する立場になっていくという。これは、全国の組合の中でほとんどないです。企業内の告発としてはゼネラル石油の労働者が少しやったくらいなんです。非常に稀有な経験をしてるんですが、何故そんなことが出来たのかなということが、外側から見てる我々としては非常に気になる。というふうな主旨というか背景を踏まえて研究をしたいと考えています。

山下 水俣病と労働組合、次は水俣工場の縮小と撤退というの押さえておく必要があると思います。

花田 なるほど。

山下 まあ、これは合理化ですけどね。

それから化学工場の関係の研究者で、もう亡くなったけど、近藤完一さん¹¹⁾が、いろ

10) 1950年12月～1951年2月、組合長。レッドパージにより解雇された25名の内の一人。

11) 近藤完一（1930-1997）。早稲田大学学生時代から合化労連書記。後に宮城教育大学教授。著作に、『現代技術の論理：巨大化のはらむ矛盾』東洋経済新報社、1973年、『日本化学工業論』勁草書房、1968年など。

んな本を書いてるし、星野芳郎さん¹²⁾は、チッソの企業分析をやってくれたので、ここには、かなりの資料が残ってると思います。それは参考にできるんじゃないかと思ます。それと女性労働者の件で、化学工場で女性労働者は少ないと思われるけども、まあこれは松田さんとか大戸迫さんとか小形さんもよく知っておられるだろうけど、研究職というよりも、現場労働者、肉体労働者として働いた歴史があるんじゃないかと。

花田 女性が？

山下 はい。それと低賃金制だったとか。そういう歴史があったもんですから、捉え方として。以上3点。

酒巻 星野芳郎氏はいつごろ研究したんですか。

山下 あのですね、組合が、水俣病が表面化して判決が出て、縮小撤退で逃げていくんじゃないかというときに、その、チッソを逃がさないぞちゅう分析を。

山平 企業分析してもらったけん、本は残っとります。

小形 水俣にも何回か来てます。

山平 講演もしてもらたな。

山下 で、かなり、資料なんかもやった上で水俣工場がどうなるかちゅうのを分析してますから、化学工場の分析がそういったところの。

大戸迫 よか資料があるじゃろな。

山下 いちばん詳しいのは近藤完一さんですけどね。もう亡くなってしもたけん。

富田 近藤さんは合化労連の人だったんですか。

山下 調査部だった人です。

小形 大学出て合化労連に入ったっです。そしてずっと調査部で。

山下 特に水俣で力を入れてくれた人で。

大戸迫 教育大学だったたいな。

徳永 宮城教育大学。

山下 石油化学とか化学関係の本をかなり書いてらっしゃいますので。

山平 近藤さんがびっくりさしたったたいな。チッソが左前になってきたときに、研究所ば持つとって、そこに人ば配置しとった。こん頃は140~150人配置しとったことに、そがん余裕のあつとだろろうかて、俺に言わしたこつのあつたたいな。もう、技術部で研究するどころじゃなかもんなそんな頃は。

酒巻 組合の資料の中に原価計算ていうか、原価資料があるんですか、工場の。

山下 あると思います。現実に表に出てないなど現場から持ってきたやつとかあると思います。

糸田 それは有価証券報告書で分からないんですか。

酒巻 結果だけしか分からないので、途中、プロセス、経過がですね。ここは材料から完成品まで全部作ってるんでしょ、水俣工場は。

12) 星野芳郎 (1922-2007)。立命館大学をへて帝京大学教授。主な著作に『技術革新の根本問題』勁草書房 1958年、『反公害の論理』勁草書房 1972年など。

山下 資材関係で、原料がどのくらいで入ってきて、どのくらいで売ったとか。分析するために、そういうのを寄せよったじゃないですか。岡本さんと細谷さんが名前を変えてちょっと経営分析してますね。資料もちょっとあるんじゃないですか。

酒巻 資料を整理するのが大変だな。欲しい資料がどこにあるかが分からないから。

安定賃金闘争に至る経過と労働者のマグマ

富田 ちょっと内容に関わるようなことをいいますか。昭和25年にですね、第二組合として皆さんの組合が出来て、そして、安賃闘争までが10年くらいはありますよね。その間は、何ていうのかな、基本的にまあ、変な言い方だけど、会社と仲悪くなっていった安賃闘争を迎えたって感じなんですか。それとも良好な労使関係になる兆しがあって、他のところは安賃闘争の前に争議があったりしたんだけど、ここはそんな表立ったでかい争議はなくて安賃闘争でどーんと出たわけですか。その間ってのはどんな感じだったんですか。

小形 いや、あるですよ。ひとつあるですよ。

山平 社員と工員の、大体あれ（労働条件）が違ったんです。

富田 だんだん、こうマグマがですね、昭和25年からのこう、わだかまりがこうあって、バーンとなったんですか。単純な言い方過ぎるかもしれないけど、そんな感じですか。

大戸迫 マグマの塊があったのは昭和28年の身分制ですな。工員と社員の差がこう大きかったもんだから、それを改善するちゅうのが、長期のストライキ。それがひとつのマグマの最初だった。

山平 良好だったじゃなかったっすか。身分制が撤廃されてからは割りと良好じゃなかったっすか、会社とは。

小形 うーん。

山平 多分、安賃闘争ちゅうとは、私は分からんけども、その頃の同業各社からマイナス500円ちゅうとにカチンと私はきたと思うですよ。プラス500円なら、しとらんち思うですよ。先輩が皆そぎゃん言いよらしたですもん、職場でも、私たちが組合員になる前に。

小形 やっぱり、身分制というのは、それは。

山平 ストライキやら、とんでもなかったち思うですよ。

山下 ただ、エネルギーは、これは先輩がいちばん知っとると思うですけど、身分制で完全に是正されんかったけん差別とか残ったわけでしょ。その辺が引き金になって、それはわからんけど。

山平 私は分からんけど、会社の工学校で会社から教育された一人ですね、1年間。会社の学校は、要するに会社の言いなりにしようちゅうこつで。私は、もちろん会社の言いなりにならんかったっすけど、会社の教育ば受けとっとですよ、私たちも。まあいいように、会社から見れば。それから見ればそんな感じはありませんでしたけど。会社は自

分のいいところばかり教育したかもしれませんがね。

山下 会社は双葉会とか何とかで、その前にも教育ばしとつとでしょ。高校に行かないでも社内で教育できると。

小形 はいそうです。社内教育ば。

富田 養成校ということですか。

山平 多分、私たちは、養成したと思うですよ。昭和37年、まあ1962年に要するに何かがあるっていうとは、会社は見とったとは見とったかもしれんですよ。私たち（工学校の生徒）が全部、会社側に全部来る、て思っつたわけですからね。もともと、安賃ストが終結するまで半分以上残りましたからですね、私たちは。終結後、就労して、肩たたきにあつて、どんどん減っていきましたけどね。

山下 昭和31～32年頃もよく、組合が、中央広場で組合の大会か、なんか開いとつたですよ。

徳永 賃上げボーナスの度に。

山下 そらあつたっじゃなかるか。

花田 それは、身分制撤廃闘争というのは大戸迫さんが青年部長する前。

大戸迫 はい、前です。昭和28年ごろに、僕らがまだノンポリでですたい、もう全然ノンポリの時代だったですよ。で、28年の身分制撤廃でかなり疲れたんですよ、みんなが。疲れて、僕らの経験からいえば、その頃、学制改革があつて、高校の定時制課程が出来た直後だったもんだから、チッソの青年部員が高校定時制夜間部に、ほとんど行っちゃつたわけです。そこが青年部の第二養成所になつたつてですたい、もう思い切つたこと言われるもんだから。そして、その勢いで組合に担ぎ出されちゃつたということは経験あるんですよ。ですから、やっぱりさっきマグマという話があつたのは28年のその身分制撤廃、これがその何ていうか、結局その地元民の怒り、もう、職員さんはよそのもん、地元民とよそのものいわば闘いとつか、それはその当時としては、57日やつたけな、あんストライキは。うん、57日間のストライキをやつて、で、結局未解決のまま、勝つたじゃ負けたじゃ分からんようなまま終わつちゃつて、その執行部にしても不信任くらくと。職場は暗い雰囲気ですよ。その時は身分制撤廃で分裂しようとしたらしい、それを止めたのがその河島、あとで副社長になつた河島庸也¹³⁾という人がこれじゃいかん、ということになつて、河島とか、大木¹⁴⁾とか、それを止めたということも、本当、聞いたわけですよ。まあ言つてみれば、河島とか大木とかとかその将来の重役の連中がいわゆる典型的な企業内組合へともつていつたんですよ。で、昭和30年に私が組合役員に出た時に、その連中と替つてジゴロの出身、いわばその、下層階級、職工、いわば身分制の工員階級が執行委員になつたところが、その時に、合化労連の太田薫が指導して、その流れで合化労連のいう通りになつちやつたわけですね。かなり、もう政治的なストライキも打つごとなつたつてです。昭和34年、35年。

13) 河島庸也、1950年2月～11月、組合長。

14) 大木重光、1950年2月～11月、執行委員。

山平 そうですね。

大戸迫 そっで、経済のストライキでなくて政治的なストライキ¹⁵⁾を打ち出したもんだから、会社はものすごくカリカリきてですね、もうこらいかんとって、安定賃金を提案してきたような、私ゃ、組合においてそういった感じが今はするんですよ。だから、しばらくは先生が指摘されたように企業内組合としてまあ、適当にストライキを打って賃上げをとるとか、そんなことで、いわば組合の三役が出世するとかそんな、いわゆる典型的な企業内組合というか。

富田 そっちの道もあり得た。

大戸迫 あったわけです。ですからあの、組合を指導した連中がそのあと重役になっていったんだもん。ところがその安賃闘争に入った頃は、そういった学卒の、いわば社員さんの指導者はおらんごとなとったですもんね、完全に。岡本達明さん¹⁶⁾はこれはもう別枠で、東大出だったけれども。

富田 岡本さんというのはそういう人なんですか。

山平 その時は執行委員じゃなかったです。ただの組合員だったんです。

大戸迫 岡本さんはその会社に抵抗したもんだから、あっちゃこっちゃやられて、もう、追われようとしとったんですよ。それをほら、私たち、たまたまキャンペーンはったもんだから覚えとるんですが、岡本さんを規約改正して組合員にしたわけです。彼がどこか五島列島あたりの職場にまわされとる時に組合員にして。規約で出来たもんですから。で、組合員にしとってその執行委員にあげちゃったんですよ。かなりあのときは、苦労しましたけどね。で、岡本さんもいわば組合の役員にせんとなにもならんもんだから、逆に言うと役員に専任させたっです。あれが、安賃闘争の後かな。

山平 後ですよ。かなり後ですたい。

大戸迫 安賃闘争のころは、いわゆる学卒の執行委員なんて誰もおらんとです。

山平 誰もおらん。

大戸迫 その前が、さっき指摘されたように、まあいわば客観的にいって企業内組合の平均的な組合が何年かあったんじゃないかと思います。

小形 身分制撤廃の闘いが終結したのが昭和33年です、形としては。だからそのずるずるこう、ひっぱとった。社員と工員の壁っていうのがずっと残とったんです。それが結局、起爆剤になって安賃闘争ちゅうところまでずっと、こうきた。そういうふうになるんですね。

15) 1958年10月、組合員一般投票による警職法反対でスト権確立（実施せず）。1959年11月27日、安保改定阻止を掲げて24時間スト。

16) 岡本達明、1957年入社。1970年8月～78年7月、執行委員長。東京大学法学部卒。

身分制撤廃闘争

大戸迫 身分制というのはですね、社員さんなら55歳まで、工員は50歳までということだったんですよ。それをその何年後からか後の契約書では5年後から工員も55歳にしますという、ただ勤続年数だけの問題や資格がどうのこうのじゃなくて、勤続年数が社員は55歳、工員は50歳ちゅうのに対する、それと一緒にしろというのが定年制。

花田 賃金は工員のほうは日給月給でしたね。

山下 日給月給。

大戸迫 ああ、そうそうそう、日給月給。

花田 社員のほうは月給制ですね。

山下 そうです、そうですね、確か。

小形 それで、工員さんは日給45銭で社員は月給25円。ほかにボーナスも工員は5日分、課長は半年分など大きな差があったんです。それでその格差ちゅうのはなかなか縮まらなかった。

富田 結局、身分制闘争でちょっと格差は多少縮まったっていう感じですかね。

小形 結局、昭和33年まではやった。

大戸迫 やっと、その勤続年数だけやろが、変わったとは。

徳永 定年制。名称も変わったでしょ。

富田 名称も変わった。社員、工員という呼び方を変える。

山平 それはもう、最初の組合が出来てから主張しているですよ。

大戸迫 名前ば変えただけ、中身は変わらんとだもん。

山下 それはもう、入ったときからそぎゃんあったから。要するに、高卒以上の人には現場に事務所ばやろてするばってんが、中卒とかなんとか、一般採用にはさせんとか。

大戸迫 具体的には、地元民とよそから来た人との差ですよ。社員ちゅうのはよそもんで、工員は地元の、ほとんど100%地元民ですから。地元民とよそもんとのいわば対立というか、そういうふうに関が労働政策としてとったもんだから。

富田 さっき出たジゴロってのは何ですか。

山下 地元の人、地元の人のこと。

全体 水俣人、水俣ジゴロ（笑）。

富田 あああ、水俣人、みたいなこと。

山下 暴力団じゃなくて。

富田 ああ、そういうこと。

身分制の経験を語る

松田 今のその身分制の問題でですね、まあ身分制撤廃があるまで社員と工員は格差がある

かたちだったんですが。だから、前から大学出は入ったときから社員だけど、旧実業学校並びに新制高等学校については戦後は社員、社員として採用するのではなくて、工員長か工員区長で採用してきたわけですよ。そして、昭和26年に初めて社員の登用試験ちゅうのが始まりました。だから、身分制撤廃の組合の要求と闘いは昭和28年ですね。

富田 登用試験というのは、もうその頃はあったんだけど、受からないという印象だったんですか。受けても、そう簡単には上げてくれないという。

松田 昭和26年までは会社はしてなかったですね、何でか知らんけど。だから、26年から始まったんですが、私はまあ、格好だけは昭和23年に会社の定期採用で水俣高校から入ったんです、会社の一般採用でなくて。私がまあ、水俣だったから私は工員区長で入りました。熊工とかよその実業高校は工員長で入っとります。

大戸迫 は一、そぎゃんあったとかい。

松田 はい、私の場合はランクはひとつ下。

富田 それでも熊工の方が上だったんですか。

松田 はい、水俣高校以外は工員長で入っとります。水俣高校だったから工員区長で入ったと思います。私たちまでが旧実業学校で、次、自分たちの1年あとの連中が新制高校で。新制高校で入ったもんもおりますから、そこには話は聞いてない。ですが、もしかしたら、私たちも1年したら工員長になりましたので、新制高校で来たもんは工員長だったかもしれません。そこはちょっと分からないです。

富田 工員長というのは何ですか。

松田 さっきいったように身分制で社員と工員があって、工員の一番上なんです。

大戸迫 いわば幹部候補生。

富田 年配の人が部下にいたりするわけですか。

大戸迫 そうなんですよ。熊工出たばかりのべえべえがそら定年前の47~48歳の人のの上につくわけ。だから身分制撤廃の闘争にきたわけです。

松田 昭和27年ぐらいの時にはですね、それが社員になると完全月給制でするので病気がしょうが何しようが、丸々給料はもらえよったんですよ、1ヶ月でも2ヶ月でも。私たち工員の場合には結局21日から翌月の20日までが、その1ヶ月の働く給料。ところが社員は1日から月末なんですよ。

山平 給料日も違うた。

松田 はいはい、社員は24日が給料、工員は28日が給料。

そして、昭和27年に私も社員の登用試験を受けて通ったから、その月はもう21日から月末までの3分の1ですね、私たちは、給料はまた別にもらいました。それから、おかしいけど、旧制定時制高校の定期採用だから。嫁ごばもらえば社宅もつきました。会社と言うことには、あんたたちが会社に来たならば、そら机もあげますというのと同じように社宅もあげます。工員は、昭和27~28年は、結婚したからといって社宅はもらえなかったんです。はい。おかしな話だけど。だからそういう、意外と差別はあったという

ことなんです。

だから、そうなかったんじゃないかと思うんだけど、社員の連中は身分制撤廃闘争なんかはおどま（自分たちには）何にも影響はないと、逆に自分たちは損だと、完全月給制が、完全月給制じゃなくなったんですよ。病欠で休めばないんですよ。だから、社員の我々は、そういう労働条件は下がったと、こういう頭は正直言っていました。だから寮では身分制撤廃闘争のストライキをしとる間に、だんだんだんだん、もう長期闘争になってきたから、もう自分たちは第二組合をつくると、旗揚げするというので、社員の寮ではスト破りの練習をしていました。だから、私は、たまたまそのとき代議員だったので、代議員会の議長の河島さんに、今、寮ではこういうことを画策ちゅうか、準備やっておりますよ、ということちゃんと報告して、そして河島代議員会議長はそういう話は僕はもう聞いているから、それなりにするからということだったし、で、そのときに第二組合をつくろうという動きは係長主任団という、言うなれば職員の連中で八幡の会館にみんな集まって集会もした。ところがそのときに、さっき言ったように河島議長が、そういうことは決して会社にも組合にも為にならんと、止めろというふうに一喝をされましてですね、そのときに社員も分かった、係長も主任団もそれで納まったという、そういうような状況を私も見ておりますし、寮ではそういうことがされておりました。

だからあの、身分制撤廃の頃はあの頃はすごかったですよ。勝ったし。そこで収めることに。月給制も完全ではなく、不完全であったけれどもそれもとったんだし、それから社員工具もなくなったし。ただ、定年制だけが一気に55歳までいけずに1年ずつ伸ばして行って、5年間かけて55歳にしたということです。

大戸迫 結局そうだな、1年ずつ伸びていったけんな。

松田 そして、組合がそれを収めるときに、闘争をするときに、会社が硫酸の炉については、これはストライキやってもらうと、これは一回止めて冷えたら炉が壊れてしまう、だからこれは何とか運転さしてくれませんかといってきました。それはまあ、合化労連なんかと話をしてだったと思いますけど、一応それは書記長なんかは分かると思うけど、一応硫酸の部は補助要員を組合から出して、ストライキをしなかった。組合はしめせんと。ただしそれによって上がった利益については結局社宅をつくるということで収めてくれと主張した。そしてそれで出来た社宅については、社宅の入居は点数制なんですよ、いうならば職員の連中から点数が高いから社宅に入れるわけですよ。しかし、そのアパートについては組合員もみんな入れて、結局抽選でいうとですか、そういうことで入れましょうと、そういう特別なこともその終結についてはあったと思います。

全体 あった、あった。

松田 それが八幡の第3アパートで、私もまたそれで入りました。そういうこともあったわけですよ。

大戸迫 そうすると松田さんは、そのときはやっぱ社員側におったけん、よう分かつとるね。

私はその後で河島内閣に入ったもんだから、河島、大木という人は組合員のためというよりもおおごとになるから収めたという、将来の重役になるタイプだったから実力者だったんですよね。社員とか係長とかをぎゃん言うて一発で抑えるちゅうか。

富田 河島さんというのは重役になったんですか。

山下 副社長。副社長、最後は。

大戸迫 まあ、たいした実力だったとよ。私もまあ1年間一緒に仕事したんだけど、どうもこうも、軍人さん上がりで学卒（東大卒であった）のメンバーだったもんね。ですからまあ、河島さんと大木さんあたりの話を聞いてほら、分裂を止められたことも知ったわけですよ。それで会社にもやかましゅ言うたけども、組合もまとめにゃいかんということで打って出て、ひとつのルールをつくろうちゅうわけで、そういった組合の分裂を止めた実力者、社員たちが組合の幹部になったのが昭和30年の河島内閣ちゅうわけ。

酒巻 河島内閣…。

富田 内閣って呼んでいるんですね。さっきから内閣、内閣って呼んでるから。（笑）

大戸迫 影響力はあったということなんですよ。

花田 河島ってのはとんでもない人でね、1971年からの水俣病患者の闘争があったときに防衛隊長として出てくる男なんですよ。だから水俣病の写真にいっぱい出てきて、鉄格子の横で患者をぶん投げたりするってやってたのが河島。

山平 そんなときゃ労務担当だけんね。

大戸迫 労務担当。

松田 ただ、そういうのがあったのがですね、やっぱり今度の安賃闘争のときにもですね、伏線としてですか、何か社員の中に、昔の社員の中に、結局おどま（自分たちは）組合があるばかりで損しとととぞという、そういうのが正直な話しずっとあるわけですよ。だから安賃闘争のときに結局、第二組合が出来ていくんですが、それもその、最初はやはり学卒だとか、そういう昔の社員の連中が、結局崩れていったわけですね。で、そのときになんと言うかといえば、（社員処遇を受けていた私に）「松田くん、松田くん、おどま、だいたい人並みにしてきたっじゃなかるか、もう全部自分の身のまわりば見てみればもう全部いくばい」と、もう私たちにも「もうこの辺で松田くん、どぎゃんじゃるか」と、こういうふうにしてほしい、まあ私たちに対しても、「もうこの付近でよかつじゃなか」というふうにして、ほしい落ちていったということですよ。だから、身分制ちゅうのは、私は最後まで残っていたと思うとです。

社員登用試験と労働者のプライド

富田 そうすると、社員登用試験制度が昭和26年に出来たというけど、当時のそれは、どんどん上がれる制度が出来たっていう印象ではなくて、まあそんなこともありましたよ、みたいな感じででしかないっていうか、その影響はないって感じですかね。

徳永 いや、それで上がった人もいますね。登用試験で社員になった人も何人かいるんです。まあ数は多くないと思いますけど。昔の工学校時代、不知火クラブで勉強した人は何人かは社員になって、水俣出身者をやっば登用してます。はい。数は少ないですよ。

松田 何ですか、戦時中はなかったんですかね。

富田 ないんじゃないでしょうか。

花田 戦後じゃないですか。

全員 戦後、戦後。

富田 社員登用制度は戦後あちこちでつくって、それが結構、頑張れば上がれるんだっていうんで、労務管理に、影響したというふうに言っている人もいますよね。

山下 労務管理に使ったんですよ。

徳永 それぞれ係長、要するに係長クラスかなあ、あのとき社員になった人は。だいたい係長クラスでとまっとるみたいですね。課長なんかは言ってないな。

大戸迫 そらない、いくのはない。そらない。

徳永 だから、係長クラスで。

大戸迫 後からもう、数が増えたらあったかもしれんけど、いわゆる部下を把握する立場といますかね、せいぜい上がっても、言ってみれば軍隊式でいえば小隊長くらいかな。

山平 そんな頃の社員登用試験ちゅうたって、今でいえば、えらいよかごた気のするな。今のはたいしたこたなかじゃけん。

山下 社員になれば全然違うけんな。

山平 今は今で高卒でも何でも部長になるけんですな。部長にならんとおかしちゅう。昔なんか絶対高卒なんか、部長になるて、課長になるも、ないと思うとるけん。・・・なあ。

徳永 昔は頭のよか人（笑）がいっぱいいたからな。うえに、上がりようがない。

職能制度

小形 昔は試験受けるときに所属長が、とにかく試験受けてくれんかといってきた。いやとにかく受けると、30点取ればいいといってきた。30点くらいしか値打ちのせんのは、いらんじゃないかと。私はそういうことはやりませんというかたちでやらなかったです。

富田 やらなかったんですか。

小形 やらなかったです。

富田 そういう、わしは受けんぞっていう人々は昔はかなりいたんですか。

小形 それはやっぱり私たちは別な技術部の、技術的なプライド持ったもんですから、「お前たちなんか」という気持ちがあるわけです、心の中に。そこまでして、というのがあったです。後になっておもえばという話ですけど。

山平 そうはいつでも、松田さんのような人が残ったでしょ、何人でも、うちの組合には。

小形 松田さん、山本高昭さん…。

山平 書記長連中は結構残ったですけどね、そのときの書記長はな。

小形 ああ、そうか。江口も。

山平 そう江口政春さんとか。

山下 江口も、正安さんは何年になったっけな、執行委員になったとは。執行委員になったときには組合にな身分制みたいなのがあったといわれていた。おら、(組合の)試験ば受けたと(笑)。

松田 大戸迫さんよりちっとあとだもんな。昭和31~32年で思う。

山下 そんなころはやっぱ、組合の中にも、執行部の中にも、だからその身分制みたいなのがあった。

小形 会社もそういうことを考えるわけたい、いろいろなことを。それで私みたいなのには、そんなことまでしてでも何とか受けさせようとした。

大戸迫 こらやっぱその、労務政策の一環でしょうもんね。懐柔策というか本当にほしい人はたい、何とかかんとかして吊り上げとくというか。そらもう会社ならそれくらいはするでしょ。

山平 組合入るときゃ、反対しとったわけですけどん。闘争後はですね。何年やったかな、解除されたとは。解除された後に入ったけん。組合が解禁したでしょ。もう職能制度になったでしょ。そしてそのまま職能制度で賃金、給料は上がらんかったでしょ。それである程度解禁したっですよ。

松田 ああ、受けてもよかと。

山平 うん、受けてもいいですよていうか。そっから私は受けたっですけん。

富田 その解禁。

山平 解禁ちゅうか、職能制だけんですね、もうそのまましとったっちゃ給料は上がらんじゃなかですか。職能で決まりますから、ある程度は。

松田 組合は職能制度反対ちゅう感じやったもんな。

山平 組合は、最初職能制度には反対で、さっき言ったようにずーっと職能制度には反対してきたっですよ。登用試験制度には反対してきたんですよ、私も職場の所属長から(試験を受けるように)言われるわけですよ。そうすると周りも言うわけですよ。その頃私も執行委員もしとって、組合も反対しとって、でくろうかいて(試験を受けるなどできるもんかって)。よかて。

大戸迫 組織を弱体化する方法には、こんな方法しかないと・・・。

山下 反対に国家試験だけは受けさせんかったけんな。はじめは。第一組合は。

松田 受けさせんというのはおかしかっただけん。

山下 休みをとっていかないといけなかった。

小形 会社が何か。

富田 危険物取扱者とかそういうのは。

山下 いや、そうばってん、申し込み用紙とか何とか、貰いに行っちゃくれんかったで

しよ。

大戸迫 結局、私はもう勝手に受けよった。私は、後で勝手に受けていった。そういう形で、登用試験は奨めるけども、国家試験の危険物とか高圧ガスとか第一組合には受けさせんとですたい。そして第二組合にはちゃんと余分に休みを与えて。

富田 それは安賃の後ですよ。

大戸迫 そら安賃の後、後。

山平 かなりやっぱ、うちの組合でそういうのが回ってきても、特に危険物なんかでもまわってきたとはかなり遅かったもんな。うちん組合員には受けさせんかった。

徳永 もう会社もさ、背に腹は代えられん格好の時にもう受けろ、受けろちゅうことで、そうそう運転が出来ないから、工場の。

松田 そらもう、会社はクビなるかも分からんとだけん、自分で資格は取っとかんと。

山下 それ言うて取った人もおっとですよ、だいぶ。

山平 それはそう。太田さんがそういう感覚だったそうですね。特に組合運動する人は、自分で自立するように何か持っとけと。何かあったときは、もうクビになったときはそっで飯くわなにゃちゅうこっでという話を聞いたことがある。横田さんも会計士をとられたし。

松田 だけど、そういうのをまた自分で取ると、組合運動してる時には、またこう、悩んだというかですね。いや、取れない人がいるわけですから。取れない人はどうするか。自分第一で、なら逃げていっていいのか、ちゅうと、また自分で考えるとです。だから、本当に体の弱い人とか女の人とかですね、できん人もいるんだと。そうするとなら自分は、逃げ道つくるみたいじゃなかかと思って、そこでまた自分で責められるちゅうかですな、そこが、また二股かけるみたいなのが（自分で自分を）責められるちゅうかですな。ところが、お前はそれで良かった、お前はそれで良かったち言われると、責められるちゅうか、そんな気持ちがあったですね。

花田 それは松田さんがそう思ってたわけ。

山平 松田さんな、人間の出来とっけん。

花田 いや、組合の雰囲気だったのかなって。

松田 私は、組合の雰囲気だったと思います。だから、人員整理とか撤廃闘争とかおかし、闘うのは、人間としてあたりまえと思よったから、そう言う問題は起きません。そこだけは悩みはなかった。悩みはなくて、そういうようなクビになってもよいちゅうのが、おかしかったじゃなかるかと。そうでなくて、クビになったら困るちゅう形で取り組まないと駄目じゃないかなて、そこで自分でこう、挟まれてね。やっぱり体の弱い人なり、女の人なりていうのは気になったけん、そらやっぱり行き場所ないんだよな。お前は逃げられるからそれでいいやろ、それではいけないねと、こう思っていた。それが身分制撤廃闘争の前やったから、社員の試験は受けたけど、身分制撤廃闘争があったら私は受けなかつたんじゃないかと、そう思いますし。

花田 松田さんは建築士をもっておられますよね。それは後になって取っていかれるわけですか。

松田 後から闘争になってから取ったわけですよ。こらやっぱし、これから先は俺はあんまし会社の言うこと聞かんと思って。それから福岡に受けに行った。

小形 やっぱりクビは覚悟して取っとった。だからそうじゃないと、組合は、本腰じゃかならやれないですよ。

松田 取れば本腰じゃなかった。組合運動になっとらんかったけど、そういう気持ちはしょっちゅうあった。自宅待機なんかの時にもつくづくそう思ったからですね。

小形 そうですねえ。

松田 やっぱ体の弱い人とか女の人を狙ってきたらもう、頭にきたっっちゃう感じで。

大戸迫 やっぱ話聞くと、やっぱ身分制ちゅうのがずっと尾を引いて、身分制が組合のマグマの力になったような感じが、今話聞きながら思うとですけどね。みんな意識の中では、やっぱ身分制、いわば差別というのが組合のいわば力になったということじゃないかという気持ちが。じゃなきゃ、いろんなここまでこれたやつの原点になるのがあれでしょうねえ、形としてはほら、昭和28年の身分制撤廃闘争に現れたのが、ずっと最後まで尾を引いて、それが力の源じゃなかるかというのが、話聞きながら、ああそうかと思うとですよ。

安定賃金争議後の身分制

花田 ただ、山平さんとか糸田さんもそうですかね、身分制の後に入社してることになるんですよ。

山下 そうです。後は全部そうです。

山平 何ものからんば、はよ（早く）組合がなくなっつですよ。冗談としますけど。

大戸迫 そうじゃろうなあ。

山平 やっぱり、うちのところの牧下さんとか、平塚さんとか、社員試験ば受けたという人はおられたからですね。課長とか何とかなっとれば分かりますけど、ある程度はみんながやっぱ尊敬しよったですけん、そころは、普通の社員と比べれば。社宅に舎監のような人がおったとですよ。今は空き地になっとるけど、2階建てでですね、部屋のあったとですよ。で、そこにおらしたもんだけん、いわば普通の社員が。地元の人が、平塚さんとか松田さんあたりが職長になったり、社員の試験受けてりして知っとったもんだけん、みんな尊敬しておらしたですもん。私らの部署からも、そげんしておらしたけん、わあよかなち思いよったですもん、子ども心に、そんな頃は。しかし会社のやり方ちゅうたらおかしいですけど、やっぱりちいっとずつ見えてくるじゃなかですか。こらおかしいなあちゅうこつで（第一組合に）残ったつです。何もなかったけんですね。何かあれば向こうにいとつたかもしれんですよ。

山下 安賃闘争までは、社員の資格は受くつために勉強したというけど。

山平 ちょっとですね、小さなことやけど、山下さんらが自宅待機食らって、作業して組合におさめて、賃金はプールしたことがあつとです。特昇のプールも何ヶ月か何年か続けたとかそういうのがあつとですよ。要するに賃金プールというのがあつた。そういうのは、さっき先生が言うた、企業を告発するのと一緒に、よその組合にはほとんどないと私は思います、それは。

花田 それは組合の闘争資金とは別ですか。

山平 別です。山下さんなんかはないのですが、私なんかは一時金がありますでしょ。さっき言ったように、職能によって違うでしょ。職能であればまた差があるとですよ。

山下 査定分。

山平 査定分ちゅうかですね。それを出し合うて、いくらかずつか出し合うて、全部で一律にするてしたですよ。長くはせんかったですけどね。長くはせんかったけど、やっぱ、そういうのを何回かはしたつですよ。山下さんやら自宅待機して、会社ん仕事になかたでしょ。よそに仕事にいつて、賃金はもらつて全部納めて、それをプールするちゅうやり方もしてきとつとですよ。仕事いつた人たちはほとんど、そういうやり方を。そういうのを私は、特筆すべきことと思いますけどね、うちの組合は。私はそげん思いますけどね。それはもう感心ちゅうたらおかしいですけどね。普通はでけんこつですけんね、だいたい。

花田 国労の闘争団はどうしていたかなあ。

山下 しばらくはプールしたでしょ。しばらくは。だけど長くは続かんかった。

山平 長くは続かないと思いますよね。うちも色々、賃金プールやつたですもん。差別の是正のプールやつが長ごうはせんやつたし。

山下 第一、賃上げとか何とかば公表すること自体がなあ、組合は。従業員間は競争だから、全部調査出して、組合が調査して、それで、賃上げがどれくらいあつて、一時金がどれくらいあつて、全部公表しよつたけんですね。

花田 職場で公表してたの。

山下 はい、組合員同士ですね。全部調査部に。

花田 出すでしょ。

山下 はい。それを調査部が調査して職場に返して、公表しよつたです。

山平 なして同じ職能であいつと俺と違うかて（会社に）抗議しよつたです。

富田 それいつ頃ですか。

山下 そら安賃闘争後。

全員 後でしょ。後でしょ。

富田 後で、いつ頃までですかね、昭和。

山下 40年、42～43年ごろまでかな、うん。

山平 闘争終わつて昭和38年でしょ。おれが38年から定時制に行つていたわけでしょ。それ

から3交代に会社からして差別するわけですよ。定時制に行けば単位が足りなくてしょ。それで私は38年にニポリットに配属されて三交代に変わって定時制に行かれんように差別された。みんなで押しかけていって、抗議行動ば何回か起こしてもらったことがあったです。そして、日勤になおしてもらたですけどね。

小形 だいたい45年に新しい新会社を作ったんですよ。小さい子会社をいくつも。合板とか、ポリバック（ポリプロセんでネット作成する部）工作関係とか、開発とか。あれ、開発は開発部だったかね。

糸田 昭和39年でしたからね。

山下 開発が早かった。

山平 組合は、転勤にも応じようて決めて、徳永さんたちが五井に行かれる時です。

小形 そうですね。だいたい昭和45年に工作がなくなりましたから。それで私はセントラル¹⁷⁾に9ヶ月籍があった。

山平 もう代議員の仕事だったですもん、職場で。たとえば、賃上げがあったり、一時金があったり、差別があれば抗議すつとが毎日の仕事だったですたい、抗議すつとが。

山下 また転籍させたりな。抗議行動ばすると。

山平 で、私は若かったけん、そこの代議員にはなっとらんとですけどね。こう行って話し合いしよったですけどね。

山下 身分制に話が戻って申し分けないですが、身分制の根底には低賃金政策があって、そこから身分制にきているんでしょうけどね。

山平 そうでしょうね。たぶんそうでしょう。

大戸迫 低賃金であるし、第一、50歳で辞めるのと55歳で辞めるのと、給料も差があるしたいて、無茶苦茶な差じゃなかですか。それがもうほとんど地元の人は50で辞めて、資格も下の人でしょ。もう、職長にもなったっちゃそうなんですから。

創業者の考えと工学校

山平 そうばってん、野口社長の考え方やったったいな。もともとが。朝鮮に行って同じやり方しとるわけでしょ。水俣でもそげんしとるわけたい。何回も言うたごて、交渉して止めさせて、そして誓約書書いたって反故にしたりいろいろしとるわけでしょ。チッソの方針、考え方ちゅうか。私たちが教育でも、工学校の教育でもそげん習ろたですけど、社長の考え方ちゅうてやっぱ同じですたい。

山下 工学校でも教えられていた。

山平 教えられたです。ほってなあ、朝鮮に、高麗に工場つくって、そのやり方とかいろいろ全部教えらしたですたい。

17) セントラル工事株式会社。チッソおよびチッソエンジニアリングの関連会社として、1972年12月設立。

富田 工学校というのは高等学校ですか。

山平 そう、会社の専門学校ですたい。

花田 そのときの教材かなんか持ってないですか。

山平 もってないな。ぜーんぶ言うてですたい。それば筆記せなんとですたい。

山平 会社の人が先生。

富田 正確に教えてるんですか。

山下 訓練課。教育課。

山平 そう教育課。

山下 教育担当の専門の人がいたんですよ。

山下 五井工場の建設記録にですね、かなり昔の労働者がどうだったか、どこが悪かったけん、五井工場ではこげんせんばいかんて出ています。

山下 それば見ればさっき言ったように、俺たちやどうせ組合側につかないだろうという考え方があったと思います。

大戸迫 なるほど。会社のいわば何ていうか紅衛兵みたいな感覚でやりよった。

山平 いや、そうでしょ。工学校卒は大体そのまま採用するから。会社は全部会社側に残ってくるっていうつもりだったっじゃなかるかな。

大戸迫 そうか、紅衛兵として雇ととるみたいなの。

山平 そう、そういうことじゃなかとですか。社員の中から選んでやる工学校じゃなかつたけん。簡単に言えば、学校を卒業したら会社が気に入れば採用しますよちゅうやり方だけん。

大戸迫 ああ、そういうことだな。正規採用は後からだったもんな。

山平 気に入らば採用せんて言うたもん。ほって、試用期間は2ヶ月間とったわけだけけん。

大戸迫 ああ、そうか。

山平 2年間教育ば受けさせて、また試用期間は2ヶ月したわけだから、会社は。

大戸迫 ああ、工学校通って勤まるじゃなくて。

山平 そう。

大戸迫 紅衛兵の養成学校だった（笑）。

山平 そう、そうですたい。

花田 工学校に入ってる時は給料は出てなかつたんですか。

山下 出とったです。2千円。

山平 2千円。

山平 2千円やったばってんが、その中から教科書と制服と、全部その中から払うんです。

大戸迫 そうやったっか。

富田 その2年間でいうのは、ほとんど仕事はしないんですか。

山平 もちろん、勉強ばかりですたい。さっき言ったごと専用だけけんですね。実習から職場いって、実習から2年になれば。ほって最初はですね、工作とかに配置したとですよ、

ストライキときは。そっでストライキ入りましたから。そっで4月に入ったでしょ。
大戸迫 昭和36年だったっけ。

山平 37年です。4月に入社してですね、すぐ試用期間になって、組合員じゃないわけですよ。ほっでその頃は、部分ストライキをあちこちでしよっでしょ。職場に入ったらコロケ（チッソ社内独自のボールゲーム）しよったとですよ。組合員の人がおられるわけです。それをみてストライキちゅうとはよかね、よかねて思ひよったとですよ。遊ばれるねていっていたんです。

小形 工務関係をなぜ実習させたかって言うと、やっぱり、自分で運転しながら補修が出来るというふうな多能工をつくっていきたいという気持ちがやっぱり、会社の中にあっただんでしょね。

富田 設備を当たらせる。

小形 そうです。

山平 数学関係と物理、化学なんかは、もう2年間で高校卒業以上です。叩き込んで教えたのは。

大戸迫 斉藤さん。

山平 斉藤さんは後からです、あの人は。私たちが2年になったときに1年課程で工具養成ばしたっですよ。そんな時に水俣高校から出てこられたっですたい。そのためにな、斉藤先生は。後からほ、校長もしよらしたけんですな。俺たちが、おったときの担任は、山本作治やったけんですな。作治はだいたい国語ば教えよったっです。土佐敬重はだいたいチッソの歴史ば教えよったとです。

大戸迫 ああ、なるほど。

山平 英語だけは草野先生ば連れちきて。

山下 あの人も元チッソです。

山平 チッソだから、(資料を)見てみれば名前の載っとる。

山下 そうばってんが、工学校は工場内にきたもんが、やったれば、もっところ改善してやったちゅう。

山平 そうです。

小形 やっぱ、将来の幹部候補生ちゅうか。

山平 今で言えば、その作業長の養成ばするつもりでおったっじゃなかですか。その職場でな。

山下 中卒で雇うて高卒くらいの仕事ばさせるために工学校ば。

山平 そうそう、そういうことですたい。

花田 工学校を出て入ると社員だった？ もうその時は身分制はなかった。

山平 そのときはもうなかった。ただ、技能員と技術員というのがあったですよ。さっきいったように登用試験ば受けて、高卒で受ければ技術員になったり事務員になったりするわけですよ。それと下の技能員というのがあった。

花田 技能員もあるの。

山平 技能員も6段階あると。確か6段階、技能員も。そして一番下よりひとつ上にくれた。

大戸迫 技能員で言うたっちゃ、結局、社員と工員のごたもんたい。技能員でいうのが工員。技術員というのが社員。要するに名前が変わっただけで、全然変わったらんもん。

山平 さっき言ったごと、高卒は技術員、事務員で入りますからね。

工学校と定時制高校

山下 後から工学校出た人は、幸ちゃん（高橋幸一）たちたいな。

高橋 いやおっどんな。

山下 おっどんな全然工学校もなかったたい。

高橋 なかったたい。

山下 で、幸ちゃんあたりは全然工学校に行かんかったけん。

高橋 いや、途中まで行ったたい。

山下 行かんかった。

高橋 途中で止めて、定時制に行った。

山下 定時制。

山平 教えよった。

富田 何で定時制に行ったんですか。

高橋 いや、私のときは工学校ちゅうとがなかった。

山下 希望者だったたいな。

高橋 工学校というのはなくて、仕事時間は仕事して、定時後に勉強ちゅうとがあったとです。1日8時間な仕事をしてからその後にあった。

富田 定時制にいった人もいたんですね。

山平 だから一緒にの学生の中に定時制にも行ったし、工学校にも行ったという。

山下 だから、工学校を卒業してから行った人もいるし、両方いった人もいるし、全然行かんかった人もいるわけですよ、この人たちには。それと私たちの時には工学校がなかったけん、全部定時制に行ったっですよ。

高橋 で、私たちは7人か8人か全部定時制に行ったっです。もうこのままじゃ出席日数が足らんで落第になるからで、工学校の方にやめますって行って。もう定時後やから、会社に束縛されとるわけじゃないからとって、あっちの方になおるって言って、定時制へ行ったっです。そしたら、あくる年の賃上げでもう差別された。ダウンて行ってがくんと下がる。で資格の上がるとも1年遅れ。

徳永 定時制は学校と認めてなかったもんな。

山下 そうです。最後まで認めてなかった。定時制は、組合でも問題になった。山平くんと同じだったけど、そういう勉強とか単位取ったら会社に報告しろという規定があるとで

すね。だから、定時制高校卒業してから、我々は定時制高校卒業したんだといって提出したんですよね。はじめ青婦部で要求しとってもなかなかつかんけん、後で組合でやったんだけど、後からもう組合で定時制問題をするなって言われたことがあった。というのがやっぱり松田さんが言われたように、やっぱり病弱者とか女性とか、もう高齢者で昔の学校しか出とらん人も多かけん、それを組合内ですれば問題が出てくるけんちゅうことがあっただろうと思うとですよ。

大戸迫 なんさま私たちは、定時制なもんで定時制の3期生で入って卒業した後、その後輩たちが、4時以降に学校に行くのを会社が父兄を呼んで止めたもんだから、僕も頭に来て、後輩を集めて学校に連れて行った実績のあつとですよ。その会社の気持ちもわかつとですよ。定時制行ったら全部、組合の活動ばかりして。会社が定時制の先生を目の敵にしだした時期もあつとですよ。ですからもう、何と言いますかね、幸ちゃんどま、その狭間になつたんじゃないかつかい。

高橋 一回、工学校に途中まで行って、定時制になつたんじゃないか、課長から呼ばれてな、なんで工学校ば辞めたかて。そんな時は、何て言うたつか覚えとらん。

大戸迫 本当にもう無茶苦茶やったから。会社に抗議したこともあつた。そしたら、もう何もかんも弁解したけども、結局こっちは強引に1回は連れて行ったこともあつたとですよ。先輩の立場でですね。で、もちろん学校とも連絡とつてほしいね。文部省まで認めている高校に行くのに何の文句があるのかというわけです。定時制に何の文句のあつとかいて言うたつたい。会社は、何のかんのこういった方針があるもんだからといって。そしたら先生が、俺を守つたもんだから、本当に目の敵にしたのは事実でした、あの頃は、会社が。そういう点はいまでも感じますね。

山下 そう言う意味では身分制はずつと残つたわけたいな。

高橋 嘉松健三くんは工学校の優等生で、卒業して工場長の表彰受けとつただけんな。

徳永 ああそうか。

高橋 ところが共産党運動始めたもんだけん。

山下 自宅待機の時はそんな出たつたい。

花田 お互いにご存じないことあるのですね。

全体 そらもう。

大戸迫 びっくりしました。高橋さんの今日の話ば聞いて、工学校んこつは初めて知つたぞ。

高橋 おっどんが工学校の同級生は。

山下 だいたい同世代だけんな。

山平 おっどんも初めて知つた。

学卒の組合委員長

富田 あとですね、ちょっと、組合の委員長でですね、さっきの河島さんとか、大卒で委員

長をやった人ってどれくらいいるんですか。

大戸迫 ほかに誰がおるかな。

山平 河島さんくらいのもんだったじゃろ。岡本さんを除けば。

山下 いや、長野さんもそうだろう。長野さんは法政。

小形 最初、野口さんがおる。

山平 河島さんで最後。

大戸迫 昭和30年、身分制撤廃闘争の後、組合がちょっとおかしゅうなったとき、その後、緒方さんという工員出の人がなって不信任くらって、その後を何とかまとめにゃいかんて出たのがその河島庸也さんと大木重光さんですかね。まあ、学卒は。書記長に、岡本としえさんといって、阪大出の人がおって、そこらへんが大卒、1回こっきりじゃなかったかな。

大戸迫 昭和30年です。身分制撤廃闘争がありまして、29年には組合が出来たんだけど、もう組合がかなり乱れとったもんだから、すぐ不信任くらって緒方内閣が総辞職追い込まれて、その後出来たのが河島さんがなったとだから、そのときだけでしょね、学卒、正式に学卒になったとは。

小形 その前、下飯坂ちゅうのが。

大戸迫 ああ、そうか。終戦直後のやつが。

山下 そら、昭和22年。

山平 不信任くらた。

小形 野口朗とか

大戸迫 社長の甥。だからその、人事におる人がたいな、その、組合長の方が資格が上ちゅうことと言ってみればまあ、兎玉人事部長がな、態度がおごったというか、言ってみれば何ていうとですか、将来重役になるとが、アメリカから、米軍に言われてつくった組合ですたいね。あんま当てにゃしとらんでしょたいね。

山平 やっぱ学卒が実権ば握とったごたもんですよ。例えば、その委員長なり、組合長になったときやったときをみてみれば。

富田 僕らが最近感じたんですよね。最近、日産とかの調査に行つてですね、最近、組合の委員長とかをやったような経営者が、そういうルートで出世するっていうのがあんまりなくなつたんですよね。かつては、大卒で、組合の委員長もやって社長になつたっていうのが結構いたんです。それで、どうもその色々聞いてたら、変な言い方ですけど、やっぱり企業別組合のよさつていうのがあるとすればですね、例えば、かつての組合の委員長なんかをやって出世していくとですね、もちろん悪辣な社長になることもあるんだけど、今の経営者よりもましなんじゃないかというようなね、僕の感覚なんですけど、あくまでも。要はその、情報を知っていることによって、何ていうのかな、その変なところと、労働組合を何にも知らないのとなるのが、ちょっと違うような気もしないでもないんです。そこら辺に興味があるんです。そういうルートで社長になるっていうのが

ね。

松田 今おっしゃったのは私はですね、教職員組合ですか、先生たちが先生をして教頭になるちゅうとですか、そういう形ちゅうとはちょっとありますよね。で、そういう人たちが教頭になったり校長になったりする。その人たちはやっぱり、組合のことを分かってるちゅうとですか、そういう形でなんか上手いくちゅうとですか、というところがやっぱりあるような気がしますよね。教頭、校長になる人間が組合の執行委員して、これはよく分かってもらってるというのがやっぱり何人かはおったですね。その人たちは案外。

山下 あとから組合員の目も肥えてきたんじゃないですか。学卒あたりで、あれは出世のためにやりよっとやな、ちゅうような。

酒巻 日米のね、比較研究があるんですよ。

富田 最近ね、『日本の人事部』とかいう本が訳されたんですよ。で、それを読んでそういうふうにしたのかもしれないんだけど。

酒巻 アメリカの場合と日本の場合と、経営者の道筋が違うと。日本の場合は組合がその、人事部とかにいた人間が社長になるというケースが、かつてはまあ多かった。

山平 そういうのはある。だいたい、人事担当になれば社長になる。チッソの場合は。間違いない。

酒巻 昭和20年以降、執行委員に女性の方が何人かいらっしゃいますね。

山平 田畑千鶴子（第6期から執行委員）さんちゅうて、しょっちゅう出てきなるでしょ。

酒巻 このごろはないですか。

山下 そのころは民主化ちゅうので、女性ば何人かというのはあったんじゃないですか。形式だけでも。社員だったのは一人しかいなかったです。草野ナオ先生ちゅうてから、英語をやった先生がですね。一般従業員だけど。

大戸迫 あとはたい、書記長は誰やった。

山下 あくまで飾りですたい。

花田 はい、それではそろそろ、話はつきませんが、この続きはまたということで一旦ここで今日は締めましょう。まあこんな調子でもう少しやって問題絞っていきましょう。勉強になります。

山平 船頭多かて山にのぼるて（笑）。

大戸迫 生の声だから大事ですよ。

松田 うん大事。

参考年表

- 1908年1月 日本窒素肥料株式会社設立、水俣村に石灰窒素工場（カーバイト製造）を建設。
- 1927年 朝鮮窒素肥料株式会社設立、興南工場建設開始。
- 1946年1月26日 日窒水俣工場労組（3241人）結成。組合長 野田正雄。
- 1950年1月 (株)日窒、企業再建整備法により解散、新日本窒素肥料株式会社設立、組合名称を新日本窒素肥料株式会社水俣工場労働組合と変更。
- 1950年10月25日 新日窒水俣工場でレッド・パージ。25人解雇。
- 1950年10月28日 新日窒水俣労組の越年資金要求・レッド・パージ反対の決起大会に警官出動。全員投票でスト否決。
- 1950年10月31日 新日窒水俣工場は、団体交渉以外のレッド・パージ組合幹部の工場立入禁止仮処分。
- 1950年12月09日 レッド・パージ反対闘争中の新日窒で新労組（新日本窒素水俣工場革新労働組合）が初総会（500人）、加入者2599人。旧労は150人。
- 1951年2月27日 革新労組が新日窒水俣工場労組を吸収合併、名称を新日本窒素水俣工場労働組合とする。
- 1951年8月 新日窒水俣労組、合化労連に加盟。組合員数4400名。
- 1953年10月1日 新日窒水俣労組、工職身分制の撤廃を求めて争議に入り、15日より無期限スト。11月27日妥結。
- 1956年5月1日 新日窒附属病院院長細川一が「原因不明の脳症状の患者発生」と水俣保健所に報告。水俣病発生公式確認。
- 1958年10月 総評・合化労連の指導に基づき、警察官職務執行法反対を掲げスト権確立。
- 1962年4月 春季賃上げ交渉で、会社側が安定賃金提案。争議に入る。7月23日より無期限スト。
- 1963年1月22日 労働委あっせんを労組および会社側が受け入れ、スト解除。2月1日より順次職場復帰。